

『フランス大衆小説研究の現在』あとがき

市川裕史

イントロ

宮川朗子（広島大学文学研究科教授、元・本学非常勤講師、本学国際関係学科 OG）・安川孝（本学ほか非常勤講師）・市川裕史（オレオレ）[共著]『フランス大衆小説研究の現在』広島大学出版会 2019、もうすぐ出るよ。みんな買ってね。印刷部数少ないから、早く買わないと売り切れちゃうよ。宮川「はじめに」、安川「フランス大衆小説研究動向：1990年代を始点として」と「大衆小説の詩学：犠牲者小説を中心に」、宮川「エミール・ゾラ『マルセイユの秘密』：大衆性と文学的価値」、市川「大衆小説とパンクロック・カルチャー：パトリック・ウドリーヌとヴィルジニー・デバントの場合」、宮川「おわりに」、大衆小説研究のための参考文献、大衆小説年表、索引から成る約 200 ページの小著。

思い返せば、2015 年秋、オレは宮川から（メールではなく）手紙をもらって企画に参加することになった。次のような点で躊躇したのだが、国際関係学科 OG として仏文学者になった希少種であり、かつてフランス語非常勤をお願いしたマブダチからのお誘いは断れない。「ポピュラー小説とインテリ小説があるのではなく、小説のポピュラーな読み方とインテリな（知的格差によって経済格差を正当化する、ブルジョワ的な）読み方があり、学会の枠で論じるとポピュラー小説のインテリ的な読み方に荷担する恐れがある」（2015 年 10 月 4 日、市川→宮川）。日本フランス語フランス文学会 SJLLF の知り合いが少ないオレは「安川ってだれ」と思ったが、毎週月曜昼休みに白百合女子大学仏文研究室で目の前に座ってる誠実そうな青年だった。なんという偶然。

最初の企画は、SJLLF の 2016 年秋季大会で「大衆小説研究の現在」というワークショップをやることだった。学習院大学で 2016 年 5 月

29 日に 3 人でしゃべった、録音が学会のサイトに載り、要約が学会の出版物に載ることになる。

企画の続きとして論文集を出版することになった。ほかの参加者を募る案はすぐに諦め、3 人のワークショップ報告を書き直して、フランス大衆小説研究を志す奇抜な方々にとって役立つはずの文献リストと少し比較・対照文学研究に逸脱した年表を付けることになった。出版社の第 1 候補は某大学出版会。最初に作成した目次には「はじめに」があって「おわりに」がなかった。オレが「おわりに」を書くよう依頼された。宮川「はじめに」初稿は、ワークショップの時から「3 銃士」（オレがアル中ウツのアトス）とか、宮「川」・安「川」・市「川」の「3 川」とか自称していたこともあって、フランス大衆小説研究を志す「僕・三川孝史朗」が様々な困難を退けて成功するという、言わばブルースト風の物語×批評だった。孝史朗が安川「孝」・市川裕「史」・宮川「朗」子を合わせた名前であることは言うまでもない。そう、言うまでもない。オレは「はじめに」と「おわりに」の整合性のため、この枠組みを踏襲した。孝史朗が最終的にルーザーになるという後日談が頭をよぎったが、すぐに諦め、孝史朗の姪の「あたし・たあひ」（安川「た」かし・宮川「あ」きこ・市川「ひ」ろし）という別キャラを設定した。1 日で書き上げるつもりが授業の準備やテスト採点で時間が取れず、数週間にわたって進捗状況を月曜昼、安川に聞いてもらったっけ。学識に裏打ちされた彼のアドヴァイスと励ましがなければ書けなかった。枠組みをくれた宮川も含めて、マジ 3 人の共著のように思える。オレとしては、お堅い出版社への贈り物としては、かなりキレのある文章が書けたぜ、と思った。

2017 年 10 月末の査読結果。研究の独自性、学生および文学愛好家向け入門書としての有用

性などが評価されてゴーサインが出た。「はじめに」「おわりに」の変則的文体については、大衆小説研究が蔑ろにされてきたことへの抗議、学問的挑発として御理解頂いた。(オレは面識のない)査読委員の皆様、ありがとうございます。ところが、某大学出版会の(オレはまったく知らない)誰かが、「三川孝史朗」「三川たあひ」をグーグルしたらしく、実在しない人物が書いている「はじめに」「おわりに」を攻撃したらしい。その結果、宮川は自分が「はじめに」の執筆者であることを明示したうえで三川孝史朗が誰であるかの説明を付加して書き直した。オレは屋上屋を架すのも虚しいので、オレが「あとがき」の執筆者であることを明示して註(このあとの原註 1)を付加するだけにした。すると「あとがき」を取り下げるよう要求された。オレにとっては検閲。しかし、第 2 候補の出版社と交渉するのも面倒くせえと思って、オレが削除を受け入れた以上、自己規制。金を出すヤツが口を出して作品を没趣味にするのは音楽や映画の世界ではよくあること。孝史朗&たあひの独白が対になってこそ最高の効果があげられたはずなのに…。宮川が急いで書いた別の「おわりに」が載ることになった。その後、第 3 校の頃だったか、オレの章の「オレ」を「私」に置きかえても内容は変わらないので置きかえてくれるよう依頼されたが、オレは当然、応じなかった。同じならそのままがいいじゃん。誰かがムカつくなら、オレって言い続けるのも無意味じゃない。

挑発を理解してかわせるオトナもいれば、まんまと挑発に乗るガキもいる。ガキを相手にしてこそその挑発だけ。というわけで『フランス大衆小説研究の現在』を、ここに掲載して頂く「おわりに」と一緒に楽しんでください、イェイ。

おわりに：すべては楽しい読書のために⁽¹⁾

明日は面接。今までたくさん落ちたから今度こそと思うけど、どうでもいい感じもする。三川たあひ、仏文科 8 年生、現役最後の就職試験。フランス外人部隊ならフランス語能力活かせるし、就活のために飛行機乗るのは面倒だけど(フランスのどこかにいる)叔父、孝史朗が数日泊

めてくれるだろう、とっていた。いまだき募集は男子のみって、ざげんなよ。たしかに国境は軍隊のためにあるのだから、軍人になろうとしたら自分の国の軍隊に志願するしかない、と自分を納得させた。たぶん筆記はばっちり。問題は面接。愛国心なんて見え見えの嘘だし、生活費のためという切実さを強調しよう。それに面接官の気を引きそうな話はたくさん知っている。「ダルタニャン大尉は、旧友たちの側について 17 世紀にフランス革命を先取りする自信があったものの、軍人としての職務を優先してクソ国王を支え続けました⁽²⁾。ブラジュロンヌ子爵はクソ国王に婚約者を寝取られたので海外遠征に志願し、最初の戦闘で決死の突撃をして祖国に栄光をもたらしました⁽³⁾。バルダイヤンはユグノー派の暗い未来を予見しながら、クソ離教者をテロリストの攻撃から何度も守りました⁽⁴⁾。そしてあたしは、修道女アニェスが白ドラゴンに変身してスペイン軍を撃退したように⁽⁵⁾、日の丸ドラゴンに変身して中国軍を撃退する所存です。」面接は反応速度が重要だからよく眠っておかなければならない、と思ったけどなかなか寝つけない。あたしは 20 数年の生涯を回想した。

ガキの頃、《トワイライト》シリーズにはまった。翻訳で小説を読み、映画見て、ぶあつい原書でもう一度読んだ。映画の、金髪じゃないエドワードには最後まで違和感が残った。結果として英語の勉強になった。けれども、高校の英語教師が《トワイライト》の数ページを副教材にした時は、いいオヤジが何やってるんだって思った。あたしは教師に感謝するタイプじゃない。しかも、「ヴァンパイアなんているわけじゃないじゃん」とか囁きあう、想像力の欠如した生徒たち相手にパラノーマルもの教材にして効率いいわけがない。同級生のほとんどは、飽きるまで飲食し飽きるまでファックする以外ほとんどなんの希望もないブタだった。酢豚、豚汁、フランクフルトソーセージなど、ブタにはブタの使い道があるとしても、個人の能力を向上させてこそその教育だろ。

音楽や美術も嫌いじゃないけど、自分なりに速くも遅くも浅くも深くも楽しめる読書にまさ

る快楽はない。とくに物語。登場人物たちの行動と感情を体験しながら自分の歴史観・世界観を問い直せる。多くの小説が同時代の偏見に依拠してるとしても時と場所を隔てて読む場合、ミュタント同士の対話になりえる。

大学の後輩、オペラ好きの美男子が、「たあひ先輩、オペラこそ物語と音楽と美術（舞台セットや身体的パフォーマンス）を総合する最高の芸術ですよ」と熱く語るの、そいつにおごらせて『タンホイザー』観に行った。台詞の内容を考えている間にどんどん進んじゃうシーンもあるし、もう分かったからダラダラしないでくれというシーンもある。どうもリズムが合わない。幕間にそいつと別の連れが「ヴァーグナー最高ですね」「いや、ヴェルディの方が上ですよ」って議論を始めて、そんなことは拳で決めろって思った。「おまえたちみたいな教養俗物に階級意識の共有をもたらす効果しかないクソ芸術なんて滅びちまえ⁽⁶⁾」と言い捨てて帰った。

自分のコントロールする暴力を意識しながらスポーツするのは好きだけど、スポーツ観戦は嫌い。とくにナショナルチームの応援は、邪神を崇める儀式にしか見えない。クーベルタン男爵は、国境を越えた個人の卓越を称揚したはず。人類の限界に挑戦できるヤツらがTVの前のブタどものために戦ってるわけがない。このあいだ時事フランス語の授業で課された「2017年マルセイユにおけるジャン＝リュック・メランションの躍進」という題の研究発表を準備していて、スポーツこそが「あらたな大衆のアヘン⁽⁷⁾」であり、それがTVやインターネットと結びついて、人々を楽しませつつ支配していること、そして人々が進歩に乗り遅れる恐怖、実質的な退化に適應できないことによって不適格者と見なされる恐怖のせいで自発的に支配されていることを学んだ。でも、あたしはスポーツ観戦が嫌いなのであって、これは趣味の問題だと思う。結局、授業の発表では、マルセイユのポピュラー・ミュージックの実例として「大衆馬鹿化兵器⁽⁸⁾」と「奇形学⁽⁹⁾」を聞かせて、「痴呆化した生存を諦めてゾンビとして覚醒し生者に対する戦いを、亡者どうしの戦いを選ばなけ

ればならない」という意味のことを説明した。後輩たちの多くが居眠りを始め、教師はメガネが??になった。

あたしは派生よりも遡及を好む性格で、『トワイライト』にはまった後、ローレン・ケイト『フォーリン』シリーズやL.A.ウェザリー『エンジェル』シリーズよりもアン・ライス『ヴァンパイア・クロニクル』シリーズに向かい、環望『ダンス・イン・ザ・ヴァンパイアバンド』や佐伯かよの&新谷かおる『クオ・ヴァディス』よりも永井豪『デビルマン』に向かった。そしてレファニュー「カーミラ」を読んでいる時、祖父の葬式があって、久しぶりに叔父、孝史朗に会った。ニコニコ黙ってることもできたけど、他にまともな話相手がいなかったので叔父と話をした。奨学金をもらってもうすぐフランス留学するそうだ。「伯父さん（孝史朗の伯父=あたしの祖父）、冷酷な経営者として社員やライバル企業の生き血を吸ってきたから、ヴァンパイアとして蘇るかもね。たあひちゃん、ルファニュー「カルミラ」（と叔父は発音した）に関心があるなら、テオフィル・ゴーティエの短編小説「恋する死女」も読んでみなよ。うんうん、英文科よりも仏文科に行った方がいい。フランス語で正確に速くたくさん読めるようになれ。刊本よりもガリカで新聞雑誌の初出を読め。」

叔父はすっかり自分の世界に入り込んで、あたしの「ガリカって？」は聞こえなかったらしい。いかにも親戚じゅうの鼻つまみ者らしい無責任なアドヴァイスだったけど、結果としてあたしはそれに従った。叔父をリスペクトしたわけではなく、「英語大好きな」ブタ同級生が「英文科にしようかしら」宣言していたので英文科だけは避けたかった。何のために英語使うのか考えてから専門決めろよ。金儲けが目的なら、きっぱり知性は諦めて学費相当額で起業して高卒社長になればいいじゃん。でも、あいつ第1志望落ちやがった。挫折を経験して少しはマトモになっただろうか。

あたしは叔父が修了した仏文科に入学した。入学後間もなく、大学図書館の『地獄棚』で、叔父の書いた『フランス大衆小説研究の現在』

を発見した。叔父は葬式で会った時、「僕の書いた本が出版されたら 1 冊あげるね」と言っておいて忘れやがった。《地獄棚》は除籍予定が置かれてる棚で、たいていは複数部数ある寄贈書だが、叔父の本はそこに 1 冊あるだけ。とりあえず普通に借り出せるので通読してみた。論文はあまり記憶に残らなかったけど、年表が大のお気に入りになった。そこに載っている小説や関連作品を行き当たりばつりに読むのが大学生活のおもな日課になった。フランス大衆小説の中で日本語訳のあるものは多くないし、かつて日本語訳が出版されていても大学図書館に入っているものはマジ少ない。叔父に言われたようにフランス語読解力を上げるしかない。しかし、原書ですら決して多くはない。古い時代のもので半々、新しい時代のもものはある方が珍しい。図書館司書に文句言ったら、「『パン運びの女』って古典ですか？ 昔の仏文科の学生は『三銃士』くらい自腹でリーヴル・ド・ポッシュを買ったものですよ。ヴィルジニー・デパントって大作家ですか？ ジョアン・スファールってマンガ家でしょ、規則なのでマンガは入れられません。そもそも、もうすぐ紙の本は存在しなくなるし、すでに古典はネットで無料で読めますよ。」あたしはとびきりの微笑みを浮かべて、「もうすぐ図書館と図書館員、ひいては全ての公共空間が存在しなくなるでしょうね」と切り返した。

それで叔父の言っていたガリカの使い方を習う気になった。図書館員にケンカ売った都合上、親切そうな助教さんに教えてもらった。やむをえず刊本よりも新聞雑誌の初出で読むことになった。ダメという評判の刊本が見つからなければ刊本と初出の比較は不可能。それにしても取っつきにくい。プレイヤーや古いクラシック・ガルニエなど批評版のある古典では、偉そうなイントロさえ読む気になれば、文学史・社会史・言語史などの歴史的位置づけが分かるし、常識の範囲を超える背景知識や単語にしばしば親切すぎる註がついているのに。初出で読んで意味不明になった時は、自分でリトレや T.L.F. といった大型フランス語辞典や様々な百科事典で調べなければならない。それでもしばしば意

味不明のまま。助教さんや教師たちに尋ねてもウザがられるだけなので止めた。うっかり物語の独創性に感動した後で、それが先行作品のコピペだったり単に同時代の流行だったりすることが判明する。でも、がっかりするのは止めた。物語の独創性なんて無意味。あたしを感動させた、語り口や描き方の特徴だけに意味がある。

古いけど古典じゃない作品はガリカで読むとして、新しい作品はバイト代を費やしてフランスに注文して買わざるを得ない。紙の本持ち歩いて書き込みしながら読むのが好き。書き込みのある本は転売できないし、よっぽど退屈なもの以外、本棄てるのは抵抗あるので、本棚の置ける広めの部屋を借りなければならない。はした金と引き替えに青春を蕩尽するクソ・アルバイトを幾つかした後で、マダム（戸籍上はまだ男性だけど）と出会って、夜の数時間ニコニコしてるだけでまあまあ収入の得られる、割のいいアルバイトをゲットした。酔っ払いの話すことはたいてい大衆小説のつなぎの章みたい。おかげで学費の工面ができた。ある夜、つなぎの章のくせに自分のエリート性を疑わない、なんとか大学（あたしが行ってるのとは別の大学）の教授に「君の卒論のテーマは？」って聞かれた。とっさに「マノンやミレディの復讐をするために降臨したトランプ夫人」って答えたら、冷たい沈黙が流れた。帰りがけマダムに、「さっき殺気出たわよ、思ってることをそのまま言っちゃダメ、ここでずっと働いてもらいたんだから」と注意された。分かってる。べつにそう思っていないし。

本当のところ、あたしの卒論のテーマは、「フランス語表現小説におけるルーザーの系譜：ジル・ブラスからヴェルノン・シュビュテクス⁽¹⁰⁾まで」。3 年生か 4 年生の時、卒論指導の教師に言われた、「博論の主題としても大きすぎ、近年の博論はますます小さくまとめるようになっていますし、大きすぎる主題は完成しないものですから考え直した方がいいですよ。17～18 世紀文学の後任人事ができないので、19 世紀専門の私が読まなければならないわけですが、長い読むの本当に大変なんですよ。専門外だからよく分かりませんが、例えばロマン・ピカ

レスクに関する先行研究をササッとまとめて、バルザックやスタンダールの方がいいと思いますが、そんなにル＝サージュがよければ『ジル・ブラス』の2～3シーンをちょちょと分析するくらいで充分すぎるくらいでしょう。」たしかに8年目になっても完成しない。結局、ジル・ブラスとデグリュエの場合しかまともに分析できず、「ルーザーとゴシックカルチャー」に関する序論がちっとも本論とつながらない。言われなくても分かっている。あたしは研究に向いてない。「叔父の本を《地獄棚》に置かせたのはあなたですか、あなたは社会や大学や学会における身分制度についてどうお考えですか」という質問がきましたら、聞こえないフリされた。

ゼミや授業で会う（でも、あまり話はしない）学生たちと毎年1歳ずつ年が離れ、そうこうするうちに、あたしは亡霊扱いされるようになった。ある教師が大遅刻した時、たまたま隣りに座った読書家っぽいメガネ巨乳、男子学生たちの人気者に、「あたし最近、『サン・アントニオ』シリーズにはまってるんだけど、あんた何読んでる？」って聞いたら、「本読まなきゃだめですか？」って反問された。最初、後輩たちが学科で学んだことと無関係な（できるだけ楽な、できるだけ高収入の）職に就こうとするのが不思議でならなかったけど、学んでいないからだということが分かった。アプリの使い方や就活テクニックのようなハウトゥーは学んだうちに入らない。創造的に学ばなければ仕事や人生に活かすもへったくれもない。でも、何のために生きてんだ？ おまえたちの胃袋を墓場にした生命たちに謝罪せよ。そんな後輩たちの中で珍しく真面目に勉強して進学希望を表明してるのが、イケメンでお金持ちの息子、オペラくん（仮名）だった。彼はフロベール研究をしようかブルースト研究をしようか迷っていた。

「読んで面白い方にすればいいじゃん。あたしはフロベールもブルーストもウジウジしててあんまし好きくないけど、（このあいだ死んだ）二ナ・コンパネーズのTV映画⁽¹¹⁾見ると、シャルリュス男爵って今でもキャラ立ちしてるし、『ボヴァリー夫人とパン屋⁽¹²⁾』見ると、エマもそうだよ。」

「たあひ先輩、楽しそうでいいですね…。でも、不純な映画とかの問題じゃなくて、フランス文学研究者として世に認められるためには、大作家の草稿を読み込んで生成研究において新たな地平を開くのが近道なんです。優れた先行研究もありますし。例えばの話ですけど、先輩と2人で暮らせるような安定した収入を得るには、できるだけ早く出世する必要があるじゃないですか？」

「そんなこと頼んでねえし、ブルーストやフロベールを貴族扱い、例えばフレデリック・ダールを奴隷扱いする、おまえの基準は何だ？ その作家や作品が権威とされているから、それを論じた研究者が権威になり、追従するあんたも権威になるってか？ 金魚のフン。エース機のフリをした量産機。早く出世したいなら先ず、先行研究の代表者たちを暗殺すればいいじゃん。文科省が世界と勝負する専門バカを養成したがるってしても、おまえが専門バカになりたがる必要はねえ。知の小役人、皆殺し！ 世界と勝負するフリのために小さなピークを探して、他に誰も登って来なければ『オレ様、世界一』ってか？ 小さい、小さすぎる。」

「……………」

それ以来、二度と口をきいてくれなくなった。さようなら、オペラくん、あたしは恋愛に向いてない。メガネ巨乳との幸せな繁殖を祈ってあげる。

あたしは読書とアルバイトの時間を確保しつつ就活に邁進したが、年度によっては玉砕、珍しく内定取れた年も卒論提出できずに辞退せざるを得なかった。学んだことを他人様の楽しみに役立てたいと思って、ラノベ、マンガ原作、TVドラマ制作などの業種に出願した。「腐敗した人々には小説が必要だ。」文学っぽい雰囲気面接では『新エロイーズ』序文を引用した。一方、サブカルっぽい雰囲気面接では『スペクタクルの社会』を原文つきで引用した。あたしはけっこうフランス語の発音いいはずなのに途中で遮られたりして、あまり効果的でなかったようだ。

「文化はマジに否定されてこそ意味を持ち続けられる。文化はもはや「文化的」ではあり得

ない。そのようにして文化は、まったく別の内容になるとしても、どうかこうにか文化のレベルに留まれる⁽¹³⁾。」

選考ピラミッドのかなり上まで行ったこともあった。銀行頭取のような高級スーツが出てきて言った、「添付して頂いたシナリオは実に興味深いが、足りないものがある。一流マンガ家と組んで賞をねらうには何が足りないか、自分で分析してください。」そこまでだった。賞なんてクソって呟いたのが失敗だったか。その 2～3 年後、たまたま深夜アニメ見てたら、どっかで読んだような話、あっ、あたしが応募書類に添付したシナリオそっくり。あたしの意図は、ジョルジュ・サンド『レリア』初版を現代日本が舞台のセカイ系にすることだった。ただし女が男に、上から目線で同情するセカイ系。仕事と家庭を両立させようとテンパってる双子の姉は、ある純情くんと言い寄られ、クラブの雇われマダムだから男あしらい巧いはずの双子の妹に押しつける。入れ替わりに気づいて壊れゆく純情くん。(あたしなら同情するわけないけど) 妹は純情くんに同情しつつ、姉の優越感、安っぽい道徳観にムカついて…。たしかにアニメは、あいつらのクソ会議の成果らしい、様々な萌え要素が付加されていて、しかもエンディングを安っぽい道徳観の側に回収するという離れ業をやっていた。「応募書類は返却しません」とは、こういうことだったのかと納得した。

人生は殺し合い。あいつらは暴力を金銭に変換して合法的に殺すことを選んでいる。相対的貧困によって尊厳を失った人々の苦しむ姿を見るのが、あいつらの快楽。金銭は人類のクソだから、あたしはナマの暴力によって殺すこと、物理的に破壊することを選ぶ。けれど暗殺者になるにはステルス能力、テロリストになるには信仰心に欠けている⁽¹⁴⁾。楽しい読書が人生最高の目的。スポーツ観戦は嫌だし恋愛には向いてない。ピエール・ロティが海軍やりながら小説を書いたように、アルフレッド・ド・ヴィーニーが陸軍やりながら詩を書いたように、軍人になれば、殺しと破壊によって生活費を稼ぎつつ楽しい読書のための時間を確保できるはず…。あっ、眠くなってきた。

註 ([原註] はボツ原稿のもの。[編註] は『所報』のために追加したもの。)

(1) [原註] オレはマブダチの宮川胡子から「おわりに」を執筆せよと言われて、文学・文化研究は面白いことを面白く論じてこそ役立つものじゃねえかなどと自明のことを書くのも面倒くせえと思いつつ締切を延ばしてたら、幸運にも、三川たあひと出会った。「はじめに」に登場する三川孝史朗の姪。オレは教授じゃないから、マダムの店で彼女の卒論テーマを尋ねた「なんとか大学の教授」じゃないはず。とにかくオレは彼女の手記の一部を出版させてもらう許可を得た。「あたしはパブリックを信じないから、自分の文章が出版されることにまったく関心が持てない。でもこれが叔父の本のためになるなら好きにすれば。」[編註] 既述のように第 2 稿で付加した。

(2) [編註] デュマ&マケ《三銃士》シリーズ②(『20 年後』1845)と③(『ブラジュロンヌ子爵』1847-1850)。ダルタニャンは②において、マザラン枢機卿よりゴンディ司教補佐のほうが大物だと思いつつフロンド派のアトス&アラミスと戦い、③においてルイ 14 世よりもニコラ・フーケのほうが大物だと確信しながらアラミス&ポルトスの鉄仮面クーデタを阻止する。

(3) [編註] デュマ&マケ『ブラジュロンヌ子爵』において、アトスの息子ラウルは婚約者ルイーズをルイ 14 世に寝取られたため(作者たちが意図的に 1682-1683 のアルジェ海賊に対する艦砲射撃と 1830-40 年代の征服戦争を混ぜた)アルジェリア遠征に死に場所を求める。

(4) [編註] ゼヴァコ《バルダイヤン》シリーズ 1902-1918 において、ユグノー派の貴族バルダイヤンは、女教皇フォスタの操るカトリック・テロ組織と戦い、みずからカトリック改宗を勧めたアンリ 4 世を何度も暗殺から救う(1610 年 5 月 14 日はヤボ用で不在だった)。

(5) [編註] プヴェル《リシュリユー枢機卿の剣士隊》シリーズ 2007-2010 (Pierre Pevel, *Les Lames du Cardinal*, Bragelonne, 2011) は、デュマ&マケ《三銃士》シリーズをリスペクトするユークロニーであり、黒ドラゴンに支配さ

れたスペインがフランスに攻めて来る。リシュリュエ指揮下に衛兵隊、(ダルタニャンやアトスがチョイ役で登場する)銃士隊、そして剣士隊があり、剣士隊の女性隊員、元・修道女アニェス・ド・ヴォードルイユがパリのノートルダム大聖堂における最終決戦で白ドラゴンに変身して黒ドラゴンを退ける。

(6) [編註] たあひは知らない(あるいは知らないフリをしている)が、ティモテ・ピカールが例えば次の著作でオペラを(エリートカルチャーではなく)メディアカルチャーとして研究している。Timothée Picard, *La civilisation de l'opéra: Sur les traces d'un fantôme*, Fayard, 2016.

(7) [原註] *Offensive, Divertir pour dominer: La culture de masse contre les peuples*, Éditions L'Échappée, 2010, p.8. [編註] これを書いた2017春は今(2019夏)ほど、アスリートたるもの兵士として国に仕え国民はこれを崇めよというプロパガンダが喧しくはなかった…。OLS(オフアンシヴ・リベルテル&ソシアル)はマルセイユに拠点を持つ無政府主義系アソシエーション。『オフアンシヴ』(季刊)掲載のインタビュー記事が数冊のアンソロジーとして出版されている。OLSの活動が、2017年6月11日/18日の国民議会選挙・マルセイユ第4選挙区(マルセイユ中心街)におけるジャン=リュック・メラシオン(FI)の高得票率(第1回投票で約34%、第2回投票で約60%)を準備した要素のひとつただただだろうか? ちなみにこの選挙で与党になるLREMの候補が第2回投票の対決相手であり、このひとは第1回投票で約23%。南仏に支持者の多いFNの候補は第1回投票で約11%。

(8) [原註] IAM, «Armes de distraction massive», *Revoir un printemps*, CD, Delabel-EMI, 2003. [編註] イ・ア・エムはマルセイユに拠点を持つラップ・グループ。この曲でフリーマンが次のようにラップしている、「金銭が支配すると冷静な人間がいなくなる。放送に残っていた僅かの人間性が視聴率に刺し殺される。テレビは歴史のように関心を持たせる前に楽しませる。関心を持ったときは遅すぎる。」

(9) [原註] Eths, «Térotologie», *Térotologie*, CD, Season of Mist, 2007. [編註] エッツはマルセイユに拠点を持つデスメタル・グループ。この曲でデスヴォイスとアイドル歌唱を併用するカンディスが次のように歌っている、「あたしに咬まれた恐怖の味を決して忘れるな。肉体が決して忘れないことを決して忘れるな。奇妙な拷問が、あたしたちの養った身体の発生を再発明する。吊り下げられた動物の死体、魂を差し出す人間の顔の仮面。」

(10) [編註] オレの章の「2-3-1-2:(デバントにおける)スター映画」で、「2016年4月、カティ・ヴェルネ監督がデバント『ヴェルノン・シュビュテクス』をTVシリーズとして翻案することが、有料チャンネル、カナル・プリュス社によって発表された…」と書いたが、その後、「…」の部分論じられるようになった(ここでは論じない)。すなわち、2019年4月8-22日、ロマン・デュリス主演の第1シリーズ35分×9回が放映され、その後パッケージ化された。Cathy Verney, *Vernon Subutex, saison 1*, DVD, Studiocanal, 2019.

(11) [原註] Nina Companeez, *À la recherche du temps perdu*, téléfilm, 2011 [DVD, Koba Films, 2011]. [編註] こうした小説を原作や出発点とする映像作品への言及は、大衆小説研究がメディアカルチャー研究にシフトしつつある動向を反映している。

(12) [原註] Anne Fontaine, *Gemma Boverly*, film, 2014.

(13) [原註] Guy Debord, *Œuvres*, Gallimard, «Quarto», 2006, p.855. ギー・ドゥポール/木下誠 [訳] 『スペクタクルの社会』《ちくま学芸文庫》2003, p.187を参照した。[編註] ポツ原稿ではお勉強っぽくするため原文を並記したが、ここでは省略した。

(14) [編註] デバント『ベーズ・モワ』の女主人公が復讐のためレイブ野郎を探そうとしないように(そして2019年7月18日京都アニメーション放火事件と違って)、たあひは自分の原稿をバクった会社に復讐に行かない。オレも某大学出版会に復讐に行くつもりはない、と断言しておこう。(市川裕史、本学准教授)